

日蓮大聖人御書全集

はっしゅういもくしょう

八宗違目抄

新版
831
ゝ
840

はつしゅういもくしよう

八宗違目抄

ぶんえい

ねん

がつ

にち

さい

ときじょうにん

文永9年('72)

2月18日

51歳

(富木常忍)

きく

かい

ほうほう

しやく

記の九に云わく「もしそれいまだ開せざれば、法報は迹

けんぽん

こころ

ほんじやくのおのさん

もんぐ

く

にあらず。もし顕本の意は、本迹各三なり」。文句の九

い

ほとけ

さんぜ

ひと

さんじんあ

しよきよう

なか

に云わく「仏、三世において等しく三身有り。諸教の中に

ひ

つた

おいてこれを秘して伝えず」。

ほっしんによらい

法身如来

ほとけ

ほうしんによらい

報身如来

仏

おうじんによらい

応身如来

しょうじょうきよう　ぶつしょう　うむ　ろん
小乗経には、仏性の有無を論ぜず

しゅじよう　ぶつしょう
衆生の仏性

けごん　ほうどう　はんにや　だいにちきようとう　しゅじょうもと　しょういんぶつしょうあ　りょういん　えんいん
華嚴・方等・般若・大日経等には、衆生本より正因仏性有つて、了因・縁因無し

ほけきよう　もと　さんいんぶつしょうあ
法華経には、本より三因仏性有り

しょういんぶつしょう
正因仏性

しゅじよう
衆生

りょういんぶつしょう
了因仏性

えんいんぶつしょう
縁因仏性

もんぐ　じゅう　い　しょういんぶつしょう　ほつしん　しょう　ほん
文句の十に云わく「正因仏性〈法身の性なり〉は本・

とう　つうじょう　えん　りょうぶつしょう　しゅしほんぬ　いま
当に通亘す。縁・了仏性は種子本有なり。ただ今のみに

あらざるなり」。

ほけきようだいに い

法華經第二に云わく、

「いま さんがい みな わ う
今この三界は、皆これ我が有なり」

主 國王・世尊なり

「なか しゅじよう
その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり」

親父なり

「いま ところ もろもろ げんなんおお われいちにん
「しかるに今この処は、諸の患難多し。ただ我一人のみ、能く救護をなす」導師
じゆりようほん い

寿量品に云わく、

主 國王 報身如来

「われ よ ちち もん
「我もまたこれ世の父」文 師 応身如来

親 法身如来

「ごひやくもんろん い
五百問論に云わく「もし父の寿の遠きを知らずんば、ま

た父統の邦に迷う。いたずらに才能と謂うとも、全く人の
子にあらず」。また云わく「ただ恐る、才一國に当たるとも、
父母の年を識らざるを」。

古今仏道論衡〈道宣の作〉に云わく〈慧遠法師、周の武
帝を詰する語なり〉「三皇已前はいまだ文字有らず○ただ
その母のみを識つて、その父を識らず。禽〈鳥等なり〉獸
に同じ」等云々。

俱舎宗

成実宗 一向に釈尊をもつて本尊となす。しかりといえども、ただ応身に限る

りつしゅう

律宗

けごんしゅう

華嚴宗

さんろんしゅう

三論宗

ほつそうしゅう

法相宗

しんごんしゅう

真言宗

しやくそん ほんぞん ほうしん むしむしゅう ほうしん うしむしゅう おうじん うしうしゅう
釈尊をもつて本尊となすといえども、法身は無始無終、報身は有始無終、応身は有始有終

いつこう だいにちによらい ほんぞん
一向に大日如来をもつて本尊となす

いっぎ あ だいにちによらい ほんぞん
二義有り 一義に云わく、大日如来は釈迦の法身なり

いっぎ い だいにちによらい しゃか ほつしん
一義に云わく、大日如来は釈迦の法身なり

いっぎ い だいにちによらい しゃか ほつしん
一義に云わく、大日如来は釈迦の法身にはあらず

だいにちきょう だいにちによらい しゃかむにぶつ み にんし びやっけん
ただし、大日経には、大日如来は釈迦牟尼仏なりと見えたり。人師よりの僻見なり

じようどしゅう

浄土宗

いつこう あみ だによらい ほんぞん
一向に阿弥陀如来をもつて本尊となす

ほつけしゅう

ほか

しんごんとう

しちしゅう

じょうどしゅうとう

法華宗より外の真言等の七宗ならびに浄土宗等は、

しやかによらい

ちち

し

れい

さんこういぜん

釈迦如来をもつて父となすことを知らず。例せば、三皇已前

ひと

きんじゅう

どう

とり

なか

しやうりやうちやう

の人、禽獸に同ずるがごとし。鳥の中には鷦鷯鳥も

ほうおうちやう

ちち

し

けもの

なか

うさぎ

しし

ちち

し

鳳凰鳥も父を知らず。獸の中には兎も師子も父を知らず。

さんこういぜん

だいおう

しやうみん

とも

ちち

し

てんだいしゅう

三皇已前は大王も小民も共にその父を知らず。天台宗よ

ほか

しんごんとう

しよしゅう

だいじやうしゅう

しし

ほうおう

り外の真言等の諸宗は、大乘宗は師子と鳳凰のごとく、

しやうじやうしゅう

しやうりやう

うさぎとう

とも

ちち

し

小乗宗は鷦鷯と兎等のごとく、共に父を知らざるな

り。

けごんしゅう

じっかいごく

いちねんさんぜん

た

ちやうかん

しよ

華嚴宗に十界互具・一念三千を立つること、澄觀の疏に

これ有り。あ 真言宗に十界互具・一念三千を立つること、しんごんしゅう じっかいごご いちねんさんぜん た

だいにちきよう

しよ

い

てんだいしゅう

どうい

大日経の疏にこれを出だす。天台宗と同異いかん、

てんだいしゅう いぜん

じっかいごご

いちねんさんぜん

た

天台宗已前にも十界互具・一念三千を立つるや。

き さん い

しゅしゃく あつ

すで さんじよう

記の三に云わく「しかるに、衆釈を攢むるに、既に三乗

いちじよう ゆる

さん いち

しようそうとう

じゅうあ

なに

および一乗を許せば、三・一ともに性相等の十有り。何

ろくどう

じゅう

かた

すれぞ六道の十を語らざるや」。

しゃく

てんだい いぜんごひやくよねん

にんし

さんぞうとう

この釈のごとくんば、天台已前五百余年の人師・三蔵等

ほけきよう

もの

いちねんさんぜん

みようもく

た

の法華経による者、一念三千の名目を立てざるか。

と い

けごんしゅう

いちねんさんぜん

ぎ

もち

けごんしゅう

問うて云わく、華嚴宗は一念三千の義を用いるやへ華嚴宗

は唐の則天皇后の御宇にこれを立つ。

こた い ちようかん しょうりようこくし しょ さんじゅうさん い
答えて云わく、澄観へ清涼国師の疏の三十三に云わ

く「止観の第五に十法成乗を明かす中の第二に

『真正発菩提心』○釈して曰わく、しかもこの経の上下の

発心の義は、文理淵博にして、その撮略を見る。故に、取

つてこれを用い、引いてこれを証す」と。二十九に云わく

「法華経に云わく『ただ仏と仏とのみ』等と。天台云わ

く○『便ち三千世間を成ず』。彼の宗にはこれをもつて実

となす○一家の意、理として通ぜざることなし」文。

けこんきよう

い

くやく

くどくりんぼさつ

と

華嚴經に云わく 旧訳には、 功德林菩薩これを説くと。

しんやく

かくりんぼさつ

と

ぐけつ

によらいりんぼさつ

新訳には、 覺林菩薩これを説くと。 弘決には、 如来林菩薩と

ひ

こころ

たく

えし

しゅじゅ

ごおん

えが

引けり 心は工みなる画師の種々の五陰を画くがごとく、

いっさいせけん

なか

ほう

つく

こころ

一切世間の中に法として造らざることなし。 心のごとく

ほとけ

ほとけ

しゅじょう

こころ

ほとけ

仏もまたしかなり。 仏のごとく衆生もしかなり。 心、 仏

しゅじょう

みつ

さべつな

ひと

さんぜ

いっさい

および衆生、 この三つは差別無し。 もし人、 三世の一切の

ほとけ

し

ほつ

まさ

かん

こころ

仏を知らんと欲求せば、 応当にかくのごとく観ずべし、 心

もろもろ

によらい

つく

は 諸の如来を造ると。

ほけきよう

い

りやくかいさん

もん

ほとけ

じせつ

法華經に云わく へこれは略開三の文なり。 仏の自説な

しよほう

によぜそう

によぜしよう

によぜたい

によぜりき

り」いわゆる諸法の、如是相・如是性・如是体・如是力・

によぜさ

によぜいん

によぜえん

によぜか

によぜほう

によぜほんまつくきようとう

如是作・如是因・如是縁・如是果・如是報・如是本末究竟等

い

いちだいじ

いんねん

ゆえ

よ

なり」。また云わく「ただ一大事の因縁をもつての故に、世

しゆつげん

しよぶつせそん

しゆじよう

ぶつちけん

あ

に出現したもう。諸仏世尊は衆生をして仏知見を開かし

ほつ

めんと欲す」。

れんげざんまいきよう

い

ほんがくしん

ほつしん

つね

みようほう

しんれんだい

蓮華三昧経に云わく「本覚心・法身の、常に妙法の心蓮台

じゆう

ほんらいさんじん

とく

ぐそく

さんじゆうしちそん

こんごうかい

に住して、本来三身の徳を具足し、三十七尊へ金剛界の

さんじゆうしちそん

しんじよう

じゆう

きみよう

三十七尊なり」心城に住したまえるに帰命したてまつる。

しんのう

だいにちへんじようそん

しんじゆ

ごうじや

もろもろ

によらい

ふもん

心王の大日遍照尊も、心数の恒沙の諸の如来も、普門

じんじゅ もろもろ さんまい いんが おんり ほうねん ぐ むへん

塵数の諸の三昧も、因果を遠離して法然として具す。無辺

とくかい もと えんまん かえ われ こころ しよぶつ ちようらい

の徳海は本より円満なり。還つて我は心の諸仏を頂礼す。

ぶつどうきよう い ほとけ いっさいしゅじよう しんちゆう みなによらいいま

仏藏経に云わく「仏は一切衆生の心中に皆如来有し

けつかふざ み もん

て結跏趺坐すと見そなわす」文。

と い しんこんしゅう いちねんさんぜん もち

問うて云わく、真言宗は一念三千を用いるや。

こた い だいにちきよう ぎしやく ぜんむい こんごうち ふくう

答えて云わく、大日経の義釈〈善無畏・金剛智・不空・

いちぎよう い もん ごほん あ じっかん ほん でんぎよう こうぼう

一行〉に云わくへこの文に五本有り。十巻の本は伝教・弘法

み ちしよう わた きよう ほうおう ひほう

これを見ず。智証これを渡すへこの経はこれ法王の秘宝な

ひせん ひと しめ しゃかよ い しじゅうよねん

り。みだりに卑賤の人に示さず。釈迦世に出でて四十余年に、

しやりほつ おんごん さんしよう よ まさ りやく みようほう

舍利弗の慇懃の三請に因つて、方にために略して妙法

れんげ ぎ と いま ほんじ み みようほう

蓮華の義を説くがごとし。今この本地の身、またこれ妙法

れんげ さいしんひしよ ゆえ じゆりようほん い つね りようじゆせん

蓮華の最深秘処なるが故に。寿量品に云わく『常に靈鷲山

よ もろもろ じゆうしよ あ ないし わ じようど やぶ

および余の諸の住処に在り、乃至、我が浄土は毀れざれ

しゆ や っ み すなわ しゆう ゆが こころ

ども、衆は焼け尽くと見る。』即ちこの宗の瑜伽の意な

ほしよ ぼさつ おんごん さんしよう よ まさ

るのみ。また、補処の菩薩の慇懃の三請に因つて、方にた

と い きよう しゆう よこ

めにこれを説く。また云わく「またこの經の宗は横に

いっさい ぶつきよう す ゆいうんむ が せけん こころ い

一切の仏教を統ぶ。『唯蘊無我にして、世間の心を出で、

うん なか じゆう と すなわ しよぶ しようじようさんぞう

蘊の中に住す』と説くがときは、即ち諸部の小乗三蔵

を撰む。『蘊の阿頼耶を觀じて、自心の本不生を覺る』と説

くがごときは、即ち諸經の八識・三性・無性の義を撰む。

ごくむじししょうしん

じゅうえんしょうく

と

すなわ

けごん

『極無自性心・十緣生句』を説くがごときは、即ち華嚴・

はんにや

しゅじゅ

ふしぎ

きようがい

おさ

みな

なか

い

般若の種々の不思議の境界を撰めて、皆その中に入る。

によじつ

じしん

し

いっさいしゅち

な

と

『如実に自心を知るを一切種智と名づく』と説くがごとき

すなわ

ぶつしょう

ねはんぎよう

いちじよう

ほけきよう

によらい

は、則ち仏性〈涅槃經なり〉・一乗〈法華經なり〉・如来

ひぞう

だいにちきよう

みな

なか

い

しゅじゅ

しょうごん

秘藏へ大日經なり、皆その中に入る。種々の聖言におい

せいよう

す

びるしやなきよう

しよ

でんぎよう

てその精要を統べざることなし。毘盧遮那經の疏へ伝教・

こうぼう

み

だいしち

げ

い

てんだい

じゅきよう

えん

弘法これを見る、第七の下に云わく「天台の誦經はこれ円

どん すそく

い

頓の数息なりと謂う。これ、この意なり。

だいそう こうそうでん まきだいにじゅうしち だいそう げんそう だいそう ぎよう

大宋の高僧伝の卷第二十七に「代宗〈玄宗・代宗の御宇に

しんこん こう がんこう ふくうさんぞう でし おも

真言わたる、光〈含光は不空三蔵の弟子なり〉を重んずる

ふくう み ちよくい ごだいさん い くどく

こと、不空を見るがごとし。勅委して五台山に往つて功德を

しゆ とき てんだい しゅうがく たんねん みようらく てんだいだいろく し

修せしむ。時に天台の宗学・湛然〈妙楽、天台第六の師な

ぜんかん げりよう ふか ちしゃ てんだい こうゆ え

り、禅観を解了して、深く智者〈天台なり〉の膏腴を得た

こうわい そうしじゅうよにん しょうりよう きようがい い たんねん

り。かつて江淮の僧四十余人と清涼の境界に入る。湛然、

こう あいまみ さいいきでんぽう と こうい いっこく そう

光と相見えて、西域伝法のことを問う。光云わく『一国の僧、

くうしゆう たいげ あ と ちしゃ きようほう およ ぼんそうい

空宗を体解する有り。問うて智者の教法に及ぶ。梵僧云わ

く、かつて聞く、この教は邪正を定め、偏円を曉り、止観

を明かして、功第一と推すと。再三、光に囑す。あるいは

因縁あつて重ねて至らば、ために唐を翻じて梵となして附

し来れ、某願わくは受持せんと。しばしば手を握つて

叮囑す。詳らかにするに、それ南印土には多く竜樹の

宗見を行ず。故にこの流布を願うことあるなり。

菩提心義の三に云わく「一行和尚は元これ天台一行

三昧の禅師なり。能く天台円満の宗趣を得たり。故に、お

よそ説くところの文言・義理、ややもすれば天台に合す。

ふくうさんぞう もんじん がんこう てんじく かえ ひ てんじく そうと

不空三蔵の門人・含光、天竺に帰るの日、天竺の僧問わく

つた き か くに てんだい きょうあ りち

『伝え聞く、彼の国に天台の教有り、理致ありと。すべか

ほんやく ほう しょうらい うんぬん さんぞう むね

らく翻訳してこの方に将来すべきか』云々。この三蔵の旨

てんだい がっ いま あじやりい しんごん がく

もまた天台に合す。今、ある阿闍梨云わく『真言を学せん

ほっ とも てんだい がく もんじんみないか

と欲せば、まず共に天台を学せよ』。しかして門人皆瞋る」

うんぬん

云々。

と い けごんぎよう いちねんさんぜん あ

問うて云わく、華嚴経に一念三千を明かすや。

こた い こころ ほとけ しゅじよう とううんぬん しかん いち

答えて云わく「心、仏および衆生」等云々。止観の一

い いちねん こころ たて よこ ふかしぎ

に云わく「この一念の心は、縦ならず横ならず、不可思議

おのれ

なり。ただ己のみしかるにあらず。

ほとけ

仏および衆生もまた

しゅじよう

けごん

い

こころ

ほとけ

しゅじよう

かくのごとし。

華嚴に云わく『心、

仏および衆生、この

みつ

さべつな

まさ

し

こしん

いつさい

ほう

ぐ

三つは差別無し』。当に知るべし、己心に一切の法を具する

もん

ぐ

いち

い

けごん

しも

ひ

り

ひと

ことを」文。弘の一に云わく「華嚴の下は、引いて理の斉し

あか

ゆえ

けごん

しよじゆう

こころ

たん

い

こころ

きことを証す。故に、華嚴に初住の心を歎じて云わく『心

ほとけ

ほとけ

しゅじよう

のごとく仏もまたしかなり。仏のごとく衆生もしかなり。

こころ

ほとけ

しゅじよう

みつ

さべつな

しよぶつ

心、仏および衆生、この三つは差別無し。諸仏はことごと

いつさい

こころ

てん

りようち

よ

とく、一切は心より転ずと了知したまえり。もし能くかく

げ

か

ひと

まこと

ほとけ

み

み

のごとく解せば、彼の人、真に仏を見たてまつる。身も

こころ

こころ

み

いつさい

またこれ心にあらず。心もまたこれ身にあらず。一切の

ぶつじ な

じざい

みぞう

ひと

さんぜ

仏事を作すこと、自在にして未曾有なり。もし人、三世の

いつさい ほとけ

し

ほつ

まさ

かん

な

一切の仏を知らんと欲求せば、応にかくのごとき観を作す

こころ

もろもろ

によらい

つく

こんけ

もろもろ

えんもん

べし、心は諸の如来を造ると』。もし今家の諸の円文の

こころな

か

きよう

げ

むね

り

じつ

しょう

がた

意無くんば、彼の経の偈の旨、理として実に消し難から

ん」。

しょうじよう

しあごんぎよう

小乗

四阿含経

さんぞうきよう

三蔵教

しんしょう

ろっかい

心生の六界

しんぐ

ろっかい

あ

心具の六界を明かさず

だいじよう

大乘

通教 つうぎよう

心生の六界 しんしょう ろっかい

また心具を明かさず しんぐ あ

別教 べつぎよう

心生の十界 しんしょう じっか

心具の十界を明かさず しんぐ じっかい あ

思議の十界 しぎ じっかい

爾前・華嚴等の円 にぜん けごんとう えん

円教 えんぎよう

不思議の十界互具 ふしぎ じっかいごぐ

法華の円 ほっけ えん

止の五に云わく「華嚴に云わく『心は工みなる画師の し ご い けごん い ところ たく えし

種々の五陰を造るがごとく、一切世間の中に心より造らざ しゆじゆ ごおん つく いっさいせけん なか ところ つく

ることなし。』種々の五陰』とは、前の十法界の五陰のご しゆじゆ ごおん さき じつぼうかい ごおん

ときなり」。また云わく「また十種の五陰、一々に各十法

を具す。謂わく、如是相・性・体・力・作・因・縁・果・

報・本末究竟等なり」文。また云わく「夫れ、一心に十法界

を具す。一法界にまた十法界を具すれば、百法界なり。一界

に三十種の世間を具すれば、百法界には即ち三千種の

世間を具す。この三千、一念の心に在り」文。

弘の五に云わく「故に、大師、覚意三昧・観心食法およ

び誦経法・小止観等の諸の心観の文に、ただ自他等の観

をもつて三仮を推すのみ。ならびにいまだ一念に三千具足

を具す。謂わく、如是相・性・体・力・作・因・縁・果・

報・本末究竟等なり」文。また云わく「夫れ、一心に十法界

を具す。一法界にまた十法界を具すれば、百法界なり。一界

に三十種の世間を具すれば、百法界には即ち三千種の

世間を具す。この三千、一念の心に在り」文。

弘の五に云わく「故に、大師、覚意三昧・観心食法およ

び誦経法・小止観等の諸の心観の文に、ただ自他等の観

をもつて三仮を推すのみ。ならびにいまだ一念に三千具足

いと云わす。乃至、観心論の中にまたただ三十六の問いを

もつて四心を責むるのみにして、また一念三千に涉らず。

ただ四念処の中に略して観心の十界を云うのみ。故に、

止観の『正しく観法を明かす』に至つて、ならびに三千を

もつて指南となす。乃ちこれ終窮究竟の極説なり。故に、

序の中に『己心の中に行ずるところの法門を説く』と云え

り。良に以有るなり。請う、尋ね読まん者、心に異縁無か

れ。

止の五に云わく「この十重の観法は横豎に収束し、

みみよう　しょうぎよう

はじ　すなわ　きよう　しんぎ　えら　なか　すなわ

微妙・精巧なり。初めは則ち境の真偽を簡び、中は則

しょうじよあいそ　のち　すなわ　あんにな　むじやく　いまだ　ほうたく

ち正助相添い、後は則ち安忍・無著なり。意円かに法巧み

がいかつ　しゅうび　しよしん　きく　ぎようじや　おく　か

に、該括・周備して、初心に規矩たり。行者を将送つて彼

さつうん　しよじゆう　いた　あんしよう　ぜんじ　じゅもん　ほつし

の薩雲へ初住なりへに到らしむ。闇証の禪師・誦文の法師

よ　し　によらいしやつこう　ごん

の能く知るところにあらざるなり。けだし、如来積劫の懃

ぐ　どうじよう　みようご　しんじ

求したまえるところ、道場の妙悟したまえるところ、身子

さんしよう　ほつぴ　み　と　まさ

の三請するところ、法譬の三たび説くところ、正しくここ

あ　よ

に在るに由るか」。

ぐ　ご　い　しきよう　いちじゅうろくもんないしはつきよう

弘の五に云わく「あまねく四教の一十六門乃至八教、

いちご しじゅう

いまみないけん

つか

いちじよう

い

一期の始終において、今皆開顕して、束ねて一乗に入れ、

しよきよう くく

いちじつ

い

とうぶん

あまねく諸教を括つて、つぶさに一実に入る。もし当分な

へんきよう きようしめ

し

らば、なお偏教の教主の知るところにあらず、いわんや

せけんあんしよう もの

によらい

しも

しやうたん

また世間暗証の者をや○『けだし如来』より下は称歎な

じつぼう すで

ほつけ

しよじよう

ゆえ

かえ

り。十法は既にこれ法華の所乗なれば、この故に、還つて

ほつけ もんもち

たん

しゃく

せつ

すなわ

だいふうちしやうぶつ

とき

法華の文を用いて歎ず。迹の説は、即ち大通智勝仏の時を

さ

しやつこう

じやくめつどうじよう

みやうご

指してもつて『積劫』となし、寂滅道場をば、もつて『妙悟』

ほんもん やく

われ

もとほさつ

どう

ぎよう

とき

となす。もし本門に約せば、『我は本菩薩の道を行ず』の時

さ

しやつこう

ほんじようぶつ

とき

を指してもつて『積劫』となし、本成仏の時をば、もつ

みようご

ほんじやくにもん

じつぼう

ぐご

て『妙悟』となす。本迹二門はただこれこの十法を求悟す

しんじ とう

じやくじよう

と

ほつ

るのみ。『身子』等とは、寂場にして説かんと欲するに、

もつ き よろ

く だ

おそ

物の機いまだ宜しからず、その苦に墮せんことを恐れて、

ほうべん ほどこ

しじゅうよねんしゅじゅ

じようじゅく

ほつけ

え

さらに方便を施す。四十余年種々に調熟し、法華の会に

いた はじ

りやく

ごん かい

どうしゅうしようぎ

おんごん

至つて、初めて略して権を開するに、動執生疑して、慇懃

さんしよう

ごせんた

さ

まさ

しような

し

いち

てんじ

に三請す。五千起ち去つて、方に枝葉無し。四・一を点示

さんぷつしよう

の

じようこん

ひと

こうむ

な

ほつせつ

して、五仏章を演べ、上根の人に被るを、名づけて法説と

ちゅうこん

げ

ひゅ

ねが

げこん

なし、中根はいまだ解せざれば、なお譬喩を憐う。下根は

うつわれつ

いんねん

ま

ぶつうれんめん

じつぼう

器劣にして、また因縁を待つ。仏意聯綿として、この十法

に在り。あ ゆえ じつぼう もん まつ みなだいしや たと いま もん 故に十法の文の末に、皆大車に譬えたり。今の文の

馮るところ、意よ ところここに在り。惑者はいまだ見ず、なお華嚴あ わくしや み けごん

を指す。さ けごん えんどん な し か ぶ けんたい せつただ華嚴円頓の名のみを知つて、彼の部の兼帯の説

に昧し。くら まった ほつけつだい ところ うしな みようきようどつけん のう全く法華絶待の意を失つて、妙教独頭の能を

貶挫す。へんざ しやくほん にもん かんが ごじ せつ かんが えん迹本の二文を驗えて、五時の説を檢うれば、円

極謬ごくあやまらず。何ぞすべからく疑いを致すべけん。この故に結なん うたが いた ゆえ けつ

して『正しくここに在るか』と曰う。まさ あ い

また云わく「初めに華嚴を引くは重ねて牒す。初めに引い はじ けごん ひ かさ ちよう はじ ひ

いて現文を示す。前に『心造』と云うは、即ちこれ心具なげんもん しめ さき しんぞう い すなわ しんぐ

り。故に『造』の文を引いて、もつて心具を証す。彼の経

だいじゅうはち なか くどくりんぼさつ げ と い ところ たく

の第十八の中に功德林菩薩の偈を説いて云わく『心は工

えし しゅじゅ ごおん つく いっさいせかい なか

みなる画師の種々の五陰を造るがごとく、一切世界の中に

ほう つく ところ ほとけ

法として造らざることなし。心のごとく仏もまたしかな

ほとけ しゅじょう ところ ほとけ しゅじょう

り。仏のごとく衆生もかなり。心、仏および衆生、

みつ さべつな ひと さんぜ いっさい ほとけ し

この三つは差別無し。もし人、三世の一切の仏を知らんと

ほつ まさ かん ところ もろもろ によらい

欲求せば、応当にかくのごとく観ずべし、心は諸の如来

つく いま もん げ ところ いっさい

を造ると』。今の文を解せずんば、いかんぞ偈の『心は一切

つく みつ さべつな しやう もん きやうきやうきんげん

を造る。三つは差別無し』を消せん」文。恐々謹言。

しよしゆう ぜ ひ

諸宗の是非、これをもつてこれを糾明すべきなり。

にがつじゆうはちにち

二月十八日

きゆうめい

にちれん

かおう

日蓮

花押